

オック語におけるコーダ条件による子音の半母音化

Vocalisation de consonnes en coda en occitan

多賀 吉隆
Yoshitaka TAGA

1 はじめに

ラテン語からオック語への音変化において、音節のコーダ位置に子音が予測される場合に半母音が観察されることがある。これは、多賀 (1996) がプロパロキシトンの場合について示したように、その子音が半母音に変化したためと考えられる。本稿の目的は、音節末尾の子音が位置素性をもちにくいという制約に違反しないようにするためと考えることで説明ができることを示し、この制約の解消法として半母音化があることを提案することである。

多賀 (1996) は、プロパロキシトンで語中音消失が起りうる $\acute{V}C\check{V}rV\#$ という音型の語、例えば $R\acute{O}B\check{O}REM > roire$ “擗”, $B\check{I}B\check{E}RE > beure$ “飲む”, $C\check{A}D\check{E}RE > caire$ “落ちる” について、これらの語に現れる二重母音の伝統的な説明、つまり子音が消失し母音連続が二重母音になったという説明を次の 3 つの理由で否定している。

- 直前の母音との異化と考えられるもの以外は、子音により半母音が決まる。
- 子音の消失は、他の音型における子音の弱化の程度と異なりすぎる。¹⁾
- ラテン語においてすでに子音連続があったパロキシトンの語でも同じ変化である。²⁾

さらにこれらの語のうち動詞の不定形であるものについては、活用により半母音の子音が交替する。例えば $caire$ では、 cai (直説法現在 3 人称単数) に対し、 $cases$ (直説法現在 2 人称単数) となる。現在ではこれらは不規則変化であり、共通の基底をもつかどうかには疑問が残る。しかし、過去においては共通の基底をもっていたと推測できる。その場合、制約が少ないオンセット位置で現れる子音が基底にあると考えるのが自然である。³⁾

この他に、ラテン語の v がオック語で語末になる場合、派生・屈折によるコーダ位置とオンセット位置での半母音と子音の交替が現代語の方言でもみられる。例えば、 $N\acute{O}VUM \sim N\acute{O}VAM > n\grave{o}u \sim n\grave{o}va$ のようにである。これについても他のロマンス語との比較からオック語だけがラテン語からの母音を守ったとするより、子音になったものが半母音化されたと考える方が自然である。

本稿では、このようなコーダ位置における子音の半母音化を最適性理論をかりて説明する。⁴⁾以下、第 2 節では、最適性理論によるコーダ位置での子音の位置素性についての制約をさけるやり方を Lombardi (2001) をもとに整理する。次に第 3 節では、Lombardi (2001)

で考慮されていない半母音化によりこの制約をさけることが、オック語の場合に起こっていることを示す。

2 コーダ条件とその解消

Ito (1986) は韻律音韻論の枠組で、音節についての制約と規則、とりわけコーダ位置の子音についての規則と制約について論じている。Lombardi (2001) はこれを受けて、コーダ位置の子音の位置素性についての制約を次のように定式化した。なお、Place は位置素性、C は子音性、]σ は音節の境界を表わす。

$$\begin{array}{l} *C]_{\sigma} \\ (1) \quad | \\ \text{Place} \end{array}$$

素朴な表現をすれば、「音節末の子音が位置素性をもつのは望ましくない」ということである。本稿ではこれを「コーダ条件」と呼び、式や表の中では CODA と略記する。

この制約を適応されないようにするには、まず、次の3つが考えられる。

- a. 位置素性をなくし、次の子音に同化する。
- b. コーダでなくするために、母音を加える。
- c. 子音自体をなくする。

これらの3つの場合を説明しよう。

一般に、最適性理論において、分節要素や素性の消失・挿入は、入力から出力への忠実性 (faithfulness) についての制約が、これよりも優先順位の高い有標性についての制約を守るために破られることにより起こると考えられている (例えば、(McCarthy 2002:13-14)。消失は、備忘のために MAX をつけて略記される「入力が最大限 (maximally) に出力に表現される」というタイプの制約を破ることによる。他方、挿入は、備忘のために DEP をつけて略記される「出力は入力に依存する (depend)」というタイプの制約を破ることによる。

ここでは、コーダ条件に加え、入力の子音の位置素性は出力に現れる (この節では MAX-PLACE と略記)、入力の子音は出力に現れる (この節では MAX と略記)、出力の母音は入力にある (この節では DEP と略記) の3つの条件について、それぞれ次のような順位があると考えればよい。

- a. CODA, MAX, DEP \gg MAXPLACE
- (2) b. CODA, MAX, MAXPLACE \gg DEP
- c. CODA \gg DEP \gg MAX, MAXPLACE

なお、(2)a. の場合には、語末と語中では異なるふるまいをするはずである。同化をすることができない語末では、中立化がおこる可能性がある。例えば、下のような位置素性についての階層があれば、/?/ で中立化がおこる。⁵⁾

(3) *LABIAL, *DORSAL ≫ *CORONAL ≫ *PHARYNGEAL

しかし、コーダ条件をさける方法として、(1) 中の C、つまり、子音性をなくすことによって二重母音の後半の半母音にする解決法があるはずである。以下は、この可能性を追及する。

ただし、子音性とは何かについて再考が必要であるが、それは本稿の範囲を越える。とりあえず、障害音、流音、鼻音が共通に持ち、母音、半母音が持たない素性と考える。⁶⁾

3 半母音化とコーダ条件

本節では、オック語における半母音化をコーダ条件の解消として分析する。その前提として、第 3.1 節では、子音がコーダ位置に組込まれるための制約の階層を半母音化がおこらない場合をもとに考える。第 3.2 節では、この階層に子音性についての制約を追加することで半母音化を説明できることを示す。

3.1 強勢後母音の消失と子音のコーダ位置への組込み

多賀 (1995) では、オック語のプロパロキシトンの分析から子音がオンセット位置ではなく、コーダ位置にあったと考えざるをえないことが示した。多賀 (1996) はそのため不自然な「最大コーダ原理」を考えざるをえなかった。

しかし、強勢後母音の消失により、子音がコーダ位置へ組込まれることは、複数の自然な制約を考えることで説明できる。

まず、コーダ条件を拍をもつ場合に位置素性をもたないと修正する。

(4)
$$\begin{array}{c} \mu \\ *C \end{array} \Bigg]_{\sigma}$$

|
Place

次に、韻律に関わるものからあげる。なお、SMALL CAPITAL 体の略号を表や式の中では用いる。

- (5) a. 強勢のある音節は 2 拍である (HEAVY)。
b. コーダ位置の要素は、拍が与えられる (PARSE)。
c. 拍ではかった単語の長さは伸びない (DEP- μ -Wd)。
d. 拍ではかった母音の長さは伸びない (DEP- μ -V)。

(5)a. を満すには、強勢がある音節で、母音が長い、コーダをもてばよい。これと b. はラテン語でも上位に位置付けられる制約である。

次に削除に関わるものをあげる。

- (6) a. 入力の子音は出力に現れる (MAX-C)。
b. 入力の子音 /ə/ 以外の母音は出力に現れる (MAX-ə)。

(6)b. では /ə/ がかつてあったと考えている。これは、強勢後の母音が /a/ を除いて、パロキシトンでは消え、プロパロキシトンで語末音消失をおこすものでは、habilem > àvol “悪い” のように、周りの環境の影響を受けるためである。

最後に、残念ながら今のところアドホックなまとめ方をしていると言わざるをえない制約をあげる。⁷⁾

- (7) /ð, n, r, l/ 以外の子音は、コーダ位置で拍が与えられる (PARSE- \bar{W})。

/ð, n, r, l/ は、「弱い」子音であり、以下で説明するように「強い」子音との対立がある。そこで、fortis/lenis といった素性を考えることもできるかもしれないが、ここだけでは判断を下すことができない。

まず、D に由来する */ð/ は、Rhōdanum > Rōse “ローヌ川” のように古典期までに /z/ に発達し、語中では s > /z/ と合流しているが、語末においては、TĚPĪDUM > *tēbeð > tēbe “生あたたかい” のように消えてしまう。⁸⁾ また /n/ は N に由来し、現代ラングドック方言などでは、語末では発音されないが、pan /pa/ → panet /pa'net/ のように派生するときには現れるので基底にはあると考えられるものであり、つねに語末で発音される NT, ND 由来のものと対立する。さらに、<r> と表記される /r/ (方言により [r], [r̥]) は <rr> と表記される /r:/ と対立し、<l> と表記される /l/ と <tl> と表記される /ll/ も対立する。

さて、これらに以下のような階層があると仮定する。

- (8) HEAVY >> DEP- μ -Wd >> MAX-C >> PARSE- \bar{W} >> CODA >> DEP- μ -V, PARSE

この仮定のもとで、パロキシトンとプロパロキシトンで半母音化をおこさないものの語末の変化が説明できることを示す。

3.1.1 パロキシトンの場合

-ATUM のような語尾が、*/-adə/ に変化したと考え、下の表のように出力として /-at/ がえられる。ただし、ここでは語末の無声化の問題を考えていない。なお、最適な候

補を ☞ で示す。また、! はその違反によりその候補が排除されることを示す。

(9)

$\mu \mu$ -adə	HEAVY	DEP- μ -Wd	MAX-C	PARSE- \bar{W}	CODA
$\mu \mu$ -adə	*!				
$\mu\mu \mu$ -a də		*!			
$\mu\mu\mu$ -a t		*!			
$\mu\mu$ -a t				*!	
☞ $\mu\mu$ -at					*
$\mu\mu$ -a			*!		
μ -a	*!		*		

3.1.2 プロパロキシトンの場合

オック語の場合、多賀 (1995) がまとめたように、プロパロキシトンでは、語末の子音により語中音消失するか、語末音消失するかがほぼ決まる。具体的には 制約 (7) (PARSE- \bar{W}) で除かれた /ð, n, r, l/ が語末にあるときに、語末音消失する。ただし、/r/ と /l/ については、不定詞の語尾であったり、形容詞を派生する語尾であったりするので例外も多い。

語中音消失をする SABBĀTUM > sabte “土曜日”、ASĪNEM > ase “ロバ” の場合を表にしてみる。

(10)

$\mu \mu \mu$ sabetə	MAX-C	PARSE- \bar{W}	CODA	DEP- μ -V	PARSE
$\mu\mu \mu$ s a bət		*!		*	*
☞ $\mu\mu \mu$ sabtə			*		
$\mu\mu \mu$ s a btə		*!		*	
$\mu\mu\mu$ s a bt		*!	*	*	*
$\mu\mu$ s a bt		*!*		*	**

(11)

$\mu \mu \mu$ azənə	MAX-C	PARSE- \bar{W}	CODA	DEP- μ -V	PARSE
$\mu \mu \mu$ a zən				*	*
$\mu \mu \mu$ a z n ə			*!		
$\mu \mu \mu$ a z n ə		*!		*	*
$\mu \mu$ a z n			*!		*
$\mu \mu$ a z n		*!		*	**

この表をまとめると、オック語のプロパロキシトンで語末音消失と語中音消失の両方があるのは、「強い」子音を韻律外にすることができないが、「弱い」子音を韻律外にすることができることになる。

なお、-BILEM > -able のように子音連続がオンセットに来ることができれば、それが最適になる。

3.2 子音性の喪失と母音化

半母音化が起りうるとするには、次の制約の順位が低いと考える必要がある。

(12) 入力の子音性は、出力でも現われる (MAX-CONS)。

ただし、これよりかなり高い順位の制約として「閉鎖音は閉鎖音として現われる」「粗擦性がある音は粗擦性がある音として現われる」という制約があるとする。これにより、母音化が起るのは δ (> i, z) と β (> u, v) だけになる。

まず、パロキシトンの例として、BĪBĪT > beu の例を考えてみよう。ただし、制約 (12) (MAX-CONS) の順位は、制約 (5)b.(PARSE)、(5)d.(DEP- μ -V) と同順位と仮定する。

(13)

$\mu \mu$ beβə	PARSE- \bar{W}	CODA	DEP- μ -V	PARSE	MAXCONS
$\mu \mu$ b e β	*!		*	*	
$\mu \mu$ beβ		*!			
$\mu \mu$ beu					*

なお、 δ については、パロキシトンの例がみつからないが、もしみつかった場合は、半母音化されるはずである。

次にパロキシトンの例として、CADĒRE > caire を考えてみる。上と同様の順位によると下の表の通り、半母音化がやはり最適候補になる。

	$\mu \mu \mu$ kaðrə	CODA	DEP- μ -V	PARSE	MAXCONS
	$\mu \mu \mu$ kaðrə		*!	*!	
(14)	$\mu \mu \mu$ kaðrə	*!			
	$\mu \mu \mu$ kajrə				*
	$\mu \mu \mu$ kaðər		*!	*!	

4 結果と考察

本稿では、いくつかの仮定のもとで、コーダ位置での子音の半母音化が、コーダ位置における子音の位置素性をもちにくいという制約により引き起こされると考えることができることを示した。

しかし、多くの課題が残っている。

まず、今の分析ではオック語にあわせたアドホック性がある制約を含んでいる。特に制約 (7) (PARSE- \bar{W}) はその性格が強い。これについてはより一般的な制約におきかえる必要がある。

次に、コーダ条件にほどこした修正、つまり、韻律外であればコーダで位置素性をもつことができるとしたことの是非である。ラングドック方言において、プロパロキシトンが語末音消失した場合、強勢位置の移動が起ることが少なくない。例えば、*turbūlum > *trébol > trebol [tre'βul] のような例がある。このような場合、基底にアクセント位置の指定がある自由アクセントから、音型のみによりアクセントが決まる固定アクセントへ変化したと考えれば分析と両立する。しかし、基底にアクセントの指定があったが、最後の /l/ が拍をもつことで、アクセントが移動したと考えることもできる。韻文の場合、このような語では最後の子音が韻文としての韻律に数えられないので、前者としたいが、オック語のより多くの資料と他の言語における類似の現象の資料が必要である。

さらに未解決な問題として、caire のように /z/ ~ /j/ の交替がある動詞については、ラングドックの西部方言の場合に、càser のような形があることをどう説明するかもある (Sauzet et al. 1995)。この形が問題になるのは、語中の場合と語末の場合が、はたして同じ仕組みで半母音化されているかという問題につながるからである。今の分析においては、<s> で表わされている子音が基底で母音化されないような、例えば擦音性がある子音と考えれば不定詞の形自体は説明がつくが、3人称単数の cai のような形を説明することがで

きない。ほかの解決法としては、韻律外であることを避ける制約を /r/ の場合に別あつかいすることが考えられるが、これについても追加の資料が必要である。

注

本稿は 2002 年 5 月 24 日、東京外国語大学で開かれた日本ロマンス語学会第 40 回大会において口頭発表した内容を改題、加筆・修正したものである。貴重なコメントを下された方々、とりわけ大阪市立大学の小林 標氏、東京外国語大学の川口裕司氏に感謝する。また、多くの誤りや不備を指摘し、改善意見を示してくださった査読者には深謝したい。

- 1) オック語においては通常、母音間では無声子音が有声化し、有声閉鎖音が摩擦音化する。
- 2) 例えば、VĪTRUM > veire “ガラス”、QUADRUM > caire “隅”。
- 3) caire と類似の活用をし、類似の音型であったものとして、RĪDERE > *RĪDERE > rire “笑う”がある。これについては ritz (直説法現在 3 人称単数) に対し、rises (直説法現在 2 人称単数) となる。これも基底に子音がある、またはあったことの傍証となるであろう。
- 4) 最適性理論は、Prince and Smolensky (1993) により始められた。これは、現在、Prince and Smolensky (2002) として読むことができる。その後、Archangeli and Langendoen (1997) のような概説、Kager (1999) のような教科書が出版されている。また、大修館書店の月刊『言語』の 2001 年 8 月号で特集されている。
- 5) これは Lombardi (2001:29) の表現をかえたものである。
- 6) 問題となっている部分については、Chomsky and Halle (1968) と同じである。
- 7) この制約に違反する場合は、当然 (5)b にも違反する。
- 8) ただし、ただし、一部の方言ではアクセントが移動し、消えずに *tebés* の形である。

参考文献

- Alibert, Louis (1965) *Dictionnaire occitan-français*. I.E.O.
- Anglade, Joseph (1921) *Grammaire de l'ancien provençal*. Klincksieck.
- Archangeli, Diana and D. Terence Langendoen. eds. (1997) *Optimality Theory: An Overview*. Explaining Linguistics, Blackwell.
- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *Sound Pattern of English*. Harper & Row.

- Ito, Junko (1986) "Syllable Theory in Prosodic Phonology." Ph.D. dissertation. University of Massachusetts at Amherst.
- Kager, René (1999) *Optimality Theory*. Cambridge Textbooks in Linguistics, Cambridge UP.
- Lafont, Robert (1971) *L'Ortografia occitana*. C.E.O.
- Lagarde, André (1991) *Le Trésor des mots d'un village occitan*. I.E.O.
- Lombardi, Linda (2001) "Why Place and Voice Are Different: Constraint-Specific Alternations in Optimality Theory." In Linda Lombardi. ed. *Segmental Phonology in Optimality Theory: Constraints and Representations*. Cambridge UP. .
- McCarthy, John J. (2002) *A Thematic Guide to Optimality Theory*. Research Surveys in Linguistics, Cambridge UP.
- Mistral, Frédéric (1932) *Le Trésor du Félibrige*. Delagrave.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993) "Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar." Technical Report No. 2, Rutgers University Center for Cognitive Science.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (2002) "Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar." ROA Version. ROA-537, <http://roa.rutgers.edu/>.
- Ravier, Xavier (1978-1993) *Atlas linguistique et ethnographique du Languedoc occidental*. CNRS.
- 多賀吉隆 (1995) 「オック語におけるプロパロキシトンの解消について」『ロマンス語研究』第 28 号、77-86 頁.
- 多賀吉隆 (1996) 「オック語のプロパロキシトン起源の二重母音について」『ロマンス語研究』第 29 号、43-50 頁.